

## P-69

## 慢性関節リウマチと瘀血との関連性—5年後の検討—

富山県立中央病院和漢診療科<sup>a)</sup>, 富山医科薬科大学和漢診療学講座<sup>b)</sup>

○高橋宏三<sup>a)</sup>, 藤永 洋<sup>a)</sup>, 新沢 敦<sup>b)</sup>, 小暮敏明<sup>b)</sup>, 寺澤捷年<sup>b)</sup>

【目的】これまでわれわれは、慢性関節リウマチ (RA) の活動性と瘀血の重症度との関係を検討し、両者の間に関連性が存在することを報告した<sup>1) 2)</sup>。5年を経過した時点でこれらの症例が現在どのようなになっているのか再度検討する機会を得たので報告する。

【方法】1996年4月に瘀血との関連を検討した RA 78 症例のうち、その後も通院を続けて2001年4月に受診した45例 (男2例, 女43例, 平均66.7歳) を対象とした。前回同様に外来主治医が瘀血スコア, Stage, Class, 疾患活動性に関するデータなどを調査票に記入し、後日回収し集計した。

【結果】Stage分類では、Stage II が14例, III が8例, IV が23例であり、II あるいはIIIのままとどまって進行していない症例が16例あった。瘀血群と非瘀血群とに分けてランスバリー活動性指数を比較すると、瘀血群 24 例は  $42.5 \pm 19.1$  (mean  $\pm$  SD), 非瘀血群 21 例は  $28.9 \pm 17.6$  で、瘀血群が有意に ( $p < 0.05$ ) ランスバリー活動性指数の高値を示した。また、瘀血スコアは有意にランスバリー活動性指数と相関していた ( $R = 0.35$ ,  $p < 0.05$ )。瘀血から5年後に非瘀血へと改善した8例はランスバリー指数が減少傾向を示した ( $p < 0.1$ )。5年後に非瘀血から瘀血へと増悪した8例では有意なランスバリー指数の増加を認めた ( $p < 0.05$ )。

【考察と結論】RAの活動性と瘀血の重症度との関連性について5年前と同様の結論が得られた。これらの研究は駆瘀血剤を用いたRAの漢方治療に一定程度の根拠を与えるものとする。

1) 高橋宏三ら：和漢医薬学雑誌 13：432 - 433, 1996.

2) Takahashi K., et al.: J. Trad. Med. 15：123 - 126, 1998.